

渥美窯の成立に関する一試論

浅田 員由

1. はじめに

渥美窯は、12世紀初頭に出現し、中世窯業の端緒を開きながら、常滑窯や瀬戸窯の発展の前に、短期間で歴史の幕を引いた窯業地である。この渥美窯における最も特徴的な製品に、蓮弁文壺で代表される経筒外容器がある。渥美窯の経筒外容器は、壺・甕等からの転用としてではなく、さまざまな形体を持つとはいえ、専用の外容器として作られたものが多い。このことは、同じく経筒外容器の需要に応えた常滑窯が、生活用品としての壺・甕を転用していることと較べて、渥美窯の性格を際立たせている。

経筒外容器は、経文を後世に伝えることを目的にした埋経の容器として使用されるもので、その需要は、埋経の流行に左右されている。我国における最初の埋経は、藤原道長の発願によって、寛弘四年(1007)金峯山で行われた。金峯山は、山岳宗教の聖地として、古来信仰されてきたところである。この例のように埋経の行われた場所は、霊山・聖地とされた山上や山腹に多い。特に、古代からの山岳信仰を守り続ける、修験の道場としての聖地が選ばれている。

11世紀初頭に始まる埋経は、12世紀に最盛期を迎える。それは、年代の確かな埋経遺物514点のうち209点が、12世紀の100年間に集中していることから明らかである。この12世紀は、いわゆる院政期にあたり、古代から中世へと社会が激しく変化した時代であった。従来の権威が否定され、新しい秩序が確立されようとする激動の世紀に、現世の利益・来世の安楽を託して、埋経が行われたのである。この埋経は、吉野山や熊野山のような山岳信仰が大衆化することによって最高頂に達する。渥美窯は、まさにこの時代に登場するのである。

渥美窯の窯業の特質は、院政期の変革と埋経の流行という社会状況の中で、初めてとらえることが可能といえる。院政の経済的基盤は、上皇が受領層と直接結びつくことによって確立された。藤原道長の時代であれば、下級貴族に過ぎない受領層が、院の近臣として絶大な権力を持つようになってきたのである。彼等は、国司に任ぜられた国から莫大な収益を得て、それを上皇・女院に寄進することによって、次々と国司を重任し、一層権力を確実なものとしていった。たとえば、渥美窯とかかわりの深い、藤原顕長の父親である顕隆は、『中右記』の中で「天下の政は、この人の一言にあるなり、威一天に振い、富四海に満つ。」と評されるほどの権力と財力を誇っていた。

上皇は、こうした受領のもたらす財力の上に、寺社や邸宅を次々と建造し、豪華な生活を送っていた。彼等の願望は、この安楽な生活が、現世も後世も続くことであった。その願いが埋経に託されたのである。しかし、この頃から受領による任国支配は、次第に実効性を失い、実権は直接に土地を所有する在地豪族の手に移りつつあった。このことは、渥美窯の成立を考える上で、きわめて重要である。そのことを踏まえて、渥美窯の成立と展開を、院政の内包する矛盾と中世への先駆けの観点から考えてみる。

2. 地政学上からみた渥美窯

渥美窯は、伊勢湾と遠州灘を分けるように突き出した渥美半島の中央部を中心に分布している。

この半島は、三河国に属し、全域が古代の渥美郡に相当している。渥美郡の郡衙は、半島の基部、現在の豊橋市牟呂地区に推定されている。牟呂地区は、豊川の河口左岸に位置し、三河湾に面した交通の要衝である。おそらく、半島の先端の伊良湖や三河国衙の外港である御津など、海上交通によって、三河湾全域に往来していたものとおもわれる。このことは、大宝二年（702）に持統上皇が、伊勢国から海路、三河国へ御幸したことからも窺える。

持統上皇の三河国御幸は、壬申の乱における三河国の重要性を示すものといわれている。それは、三河国が、東海道の鈴鹿関、東山道の不破関という関門を通ることなしに東国と結ぶ交通路の拠点に位置していたことである。つまり、飛鳥から伊勢国を経て海路三河国へ渡り、東国へ至るという交通路の確保が、壬申の乱における大海人皇子側の最大の課題であったのである。そして、彼等が三河国を経て東国を掌握したことにより、尾張国がその帰属を明らかにし、壬申の乱は、大海人皇子の勝利に終わった。この後、伊勢神宮が天皇家の氏神として整備されていくのは、ここが東国への海上交通の拠点として深く認識されていたからに他ならない。しかも、その重要性は、既に前代から知られていたのである。

4世紀以降、大和の王権は、東国への支配を強化するため、東海道や東山道などの主要交通路を開拓していく。これらの交通路は、沿道諸国の重要拠点を結んで設置され、地域間交通の役割をも果たすものであった。それに対して、大和と東国を直接に結ぶ海上交通路も存在していた。それが伊勢国から三河国を経て、駿河国・相模国への海上交通路である。このことは、ヤマトタケルの東国遠征が、伊勢神宮を起点として、海路駿河国あるいは相模国へ向っていることから明らかといえる。この海上交通路の重要性が認識されたのは、6世紀前半頃とおもわれる。

6世紀前半は、倭の五王による対外重視の政策が破綻し、国内統一に向う時代で、その過程において、安閑・宣化と欽明の間に、継体天皇の後継をめぐる内乱が起った。欽明と対立した安閑・宣化は、尾張国を支配する尾張連の娘日子媛を母親としており、当然彼等は、尾張氏の勢力を背景としていたものとおもわれる。このため、欽明側が東国の勢力と連絡を取ろうとすれば、尾張国を通らない交通路が必要となる。それには、伊勢南部と三河東部を結ぶ海上交通路が最も好都合である。伊勢神宮が欽明天皇の頃に天皇家と深いかかわりを持つのは、このあたりの状況を反映しているものといえる。また、ヤマトタケルの東征説話も、この頃に実際あったことを反映しているのではなかろうか。

伊勢神宮の外港大湊から対岸の伊良湖岬は指呼の間である。万葉集には、伊勢国伊良湖と詠まれていて、伊勢南部との深い関係が窺われる。また、伊勢南部から熊野にかけての地域は、後世熊野水軍として名を馳せる漁民集団の根拠地で、渥美半島との往来は頻繁であったに違いない。おそらく、伊勢南部と渥美半島は、同族意識のある人々が居住していたものであろう。海上民族としての彼等の存在があって、東国への海上交通が可能であったのである。このように、渥美窯は、古くから中央と東国を結ぶ海上交通の要衝に位置しているところに成立の一因がある。



伊勢神宮と渥美半島関係図

3. 熊野街道と渥美半島

壬申の乱に勝利を得た天武天皇は、伊勢神宮を天皇家の氏神として祀り、律令制の中に組みこんでいく。それは、伊勢湾の海上交通を掌握することでもあった。しかし、伊勢神宮は、次第に宗教的な権威の象徴としての存在となり、海上交通の要衝としての位置を失っていく。それと同時に渥美半島の重要性も薄れていった。ここが再び交通の要衝として登場してくるのは、平安時代後半である。

熊野は、紀伊半島南部の広大な地域の総称である。重畳たる山脈と複雑に入り組んだ海岸線からなる熊野は、大和に近接する地域でありながら、容易に侵入を許さない異境の地でもあった。それは、イザナミを葬った死の国であり、神武天皇の東征を阻んだ異敵の国であった。しかし、院政期には、ここは最高の聖地として脚光を浴びるのである。

熊野は、天武朝の聖地、吉野から修験の山岳である大峯山を縦断した位置にあり、修験者の聖地を形成している。一つは山の熊野と呼ばれる熊野本宮社（熊野坐神社）であり、今一つは海の熊野と呼ばれる熊野新宮社（熊野速玉社）と熊野那智社（熊野夫須美社）である。この厳しい修験の道場である熊野社への参詣が、11世紀末から13世紀初頭にかけて大流行するのである。なかでも、白河上皇から後鳥羽上皇までの院政期の上皇達は、京都から72里、往復3週間の行程にもかかわらず、驚くほどの回数の熊野御幸を行っている。

白河上皇	14度
鳥羽上皇	21度
崇徳上皇	1度
後白河上皇	34度
後鳥羽上皇	28度

熊野信仰は、基本的には「現世利益・後生安楽」の信仰である。これは、まさしく藤原道長によって始まる埋経の信仰である。つまり、11世紀初頭に起った山岳聖地への埋経にあらわれた信仰が、11世紀末に熊野詣という形で爆発的に広がったということである。道長が参詣した金峯山より遙かに遠く、しかも険しい熊野詣は、その靈験もよりあらたかであったに違いない。

この熊野信仰は、修験者である熊野先達によって全国に流布されていった。上皇を始めとして、当時の権門勢家から篤い信仰を得ていたことは、熊野信仰の地方への拡大に拍車をかけた。なかでも、新しく勃興しつつあった東国の武士階級に深く浸透していった。彼等は、渥美半島から海路伊勢に渡り熊野をめざしたのである。この交通路が熊野街道である。渥美半島は、熊野詣によって、再び東国との交通路として復活するのである。

鳥羽上皇は、保延二年（1136）に熊野に御幸している。この御幸にあたり、平清盛は、熊野本宮社を造進した功により、肥後守に任ぜられている。同じ時、藤原顕長は、五重塔を造進している。顕長はこの時越中守であったが、この年12月に三河守に任命されている。これは、五重塔の造進の功によるものであることは間違いない。清盛と顕長は、武官と文官の差はあるが、同年代の鳥羽院の近臣として、同じような経歴をもっている。おそらく、熊野社の造営を通して、両者は非常に親しい関係にあったものとおもわれる。伊勢国を本拠とする伊勢平氏の総領である平清盛との交流は、顕長を伊勢神宮に眼をむけさせるきっかけとなったかもしれない。

4. 藤原顕長と渥美窯

藤原顕長は、白河上皇の近臣として権力を振った中納言顕隆の三男で、自身も鳥羽上皇の近臣として、従二位皇后宮権大夫まで昇進した典型的な新興貴族である。彼は9才で紀伊守となり、それ以降、越中守・三河守、遠江守等を歴任した。彼の昇進の背景は、まさに院政期の受領層を代表するもので、上皇・女院等に寺社・邸宅を造進するところにあった。勿論、その財力の源泉は歴任した任国からの収益にあったことはいうまでもない。たとえば、紀伊守になった年（天治二年）の8月に、白河上皇に三重塔を造進している。また、大治五年（1130）3月には、中宮御所の土御門内裏造進の功により、従五位上に叙せられている。この顕長は、熊野本宮の五重塔造進により三河守となっているが、彼はこの時20才である。さらに、顕長は、途中遠江国司に遷った5年間を除いて、久寿二年（1155）に三河守を辞するまで、14年間の長きにわたって三河国司の地位にあった。渥美窯が始まるのは、まさに彼の国司在任中なのである。それは、渥美窯最初期の窯である大アラコ地区の古窯から出土する、顕長銘の陶片の存在からも明らかである。

正五位下行兵部大輔兼

三河守藤原朝臣

顕長

藤原氏

比久尼源氏

道守氏尊靈

従五位下惟宗朝臣

遠清

藤原氏

惟宗氏

内蔵氏

惟宗氏尊靈

惟宗尊靈

藤原氏尊靈

道守氏尊靈

（欠字補足）

と刻まれた壺が大アラコ窯から出土しているが、同様の銘を持った壺が、山梨県南巨摩郡富沢町や静岡県三島市等からも出土していて、この渥美窯製品が東国で使用されたことを、確実に示している。

大アラコ古窯は、渥美窯で最も古い型式に属する窯で、この顕長銘の壺が造られた頃、渥美窯が始まったともいえる。つまり、大アラコ窯の開窯については、三河国司である顕長の意志が強く働いていたことは確かである。それは、大アラコ窯が渥美半島の国衙領と推定される場所に築かれていることから窺える。

三河国は、『延喜式』の規定で、踐祚大嘗祭に陶器を貢納する五ヶ国の一つに挙げられている。このことは、当時、三河国が、河内・和泉・備前・尾張の陶器大生産国と比肩し得る陶器生産国であったことを物語っている。しかし、三河国の陶器生産は7～8世紀を頂点として次第に衰退

していく。この伝統ある陶器生産を復活しようとしたのが大アラコ窯であった。この試みに、顕長が直接にかかわったかは明らかではないが、受領層出身の若い顕長にとっては、充分魅力的な事業であったに違いない。彼は、大アラコ窯開窯は、良く承知していたものとおもわれる。そして、その成果を得た時、製品に自分の名前を刻したのであろう。

渥美窯の開窯された12世紀中頃は、古代の先進窯業地であった猿投窯が、山茶碗に代表される雑器生産に転換し、高級陶器の生産が衰退した時期であった。おそらく、渥美窯の開窯には、猿投窯に代って国産高級陶器を生産しようとする意図があったのではなかろうか。それは、大アラコ古窯から出土している灰釉陶器からも推測できる。

灰釉陶器は、この時期、その生産の中心であった猿投窯では、既に生産されなくなっており、漸く瀬戸窯で新しい施釉陶器の生産が試みられようとしていた。もし、大アラコ窯で灰釉陶器の生産に成功すれば、渥美窯が日本最大の窯業地として発展することも可能である。顕長、さらに三河国衙は、大きな期待をかけてこの事業を進めたに違いない。

勿論、渥美窯の開窯が、顕長の個人的野心によってのみ行われたのではないことはいうまでもない。この事業を推進した背景には、次の二つの要素がある。一つは、院を中心とする貴族層の、新しい陶器に対する欲求である。今一つは、三河国、特に渥美半島における在地勢力の台頭である。前者は、渥美窯の開窯に対して、猿投窯のもつ施釉技術を提供し、灰釉陶器の生産を試みさせた。しかし、それは失敗に終り、施釉陶器の生産は瀬戸窯に引き継がれることとなった。後者は、渥美窯製品の流通に、最も重要な役割を担った。それは、在地勢力と伊勢神宮との深いかかわりが、渥美窯製品に伊勢神宮の権威を付与したからである。

5. 伊勢神宮と渥美窯

伊勢神宮は、天武天皇の時代にその地位が確立され、律令制の中で整備されてきた。しかし、一般からの幣帛を受けない原則から、平安時代中期以降は、神郡・神領が荘園に侵食され、経済基盤が揺らぐと、次第に衰退してきた。その中で、神官達は積極的に、御園・厨といった神宮領を開拓していった。なかでも、渥美半島は、地理的な条件から、ほとんど半島全体が神宮領となった状態であった。この地域は、東国から熊野詣に向う最短路として利用され、多勢の参詣者が往来した。彼等は、熊野詣の途次、伊勢神宮へも参拝するようになった。伊勢神宮の神官達は、やがて一般の幣帛を受けないという禁を破って、積極的に参拝者を勧誘するようになっていった。おそらく、熊野社の繁栄に刺激されたことが本当のところであろうが、次第にその活動は活発化し、東国の武士階級にも伊勢神宮の信仰が広まっていった。

伊勢神宮の参拝者が増大すると、伊勢神宮の近くに熊野に代わる聖地が設けられた。それが朝熊山金剛證寺である。熊野はあまりに遠く、そこに行けない人々は、朝熊山に熊野の靈験を求めたのである。このことにより、朝熊山には、熊野と同様に多数の埋経が行われた。それに使用された経筒外容器の多くは、渥美窯製品である。伊勢神宮の神官達は、渥美窯の経筒外容器を、信仰を広める一つの手段として利用したのである。つまり、顕長に始まる渥美窯は、伊勢神宮の大衆化によって発展したといえる。このことを、渥美窯産の経筒外容器に刻された銘文から検証してみよう。

(1) 奉施入

如法經筒
右為施入意趣 僧禪仁
現世安穩後世善處也
承安二年八月廿八日
鍛冶御園住人願主
比久尼貞妙
僧觀秀
大中臣有常
造之

(以下略)

—平安遺文 418—

- (2) 奉造立如法經龜壺口事
右志者為現世後生安隱大平也
承安三年^{癸巳}八月十一日
伊勢大神宮權祢宣
正四位下荒木田神主時盛
散位 渡会宗常
—經ヶ峯經塚出土—
- (3) 奉造立如法經ツゝ一口
右尋如法經由来者慈覺大師所形法也
依此現世安隱大平後生故也
文治二年大歲^{丙午}九月十八日
加治園下司
散位 渡会宗恒助成
—經ヶ峯經塚出土—

以上の3点の經筒外容器刻銘から推定できることは、加治御園と渥美窯との関連である。加治御園は『神鳳鈔』に、内宮加治御園と記されている神宮領である。これは、田原町市街地の南西、加治地区に比定されている。そして、この加治地区には、60基以上の古窯跡からなる、坪沢古窯跡が存在している。坪沢古窯跡からは、渥美窯の代表的な製品である、蓮弁文壺も出土しており、ここで經筒外容器が生産されたことは確かである。

(1)に記された大中臣有常は、伊勢神宮の宮司を世襲する大中臣氏の一族と考えられる。この一族が早くに加治御園に移り住み、土着したものであろう。大中臣氏の名は、久安二年(1146)銘をもつ陶製五輪塔にも登場している。この五輪塔は、「遠海新所之立焼」の銘文から、湖西窯の製品であることは間違いない。承安二年(1170)の大中臣有常と久安二年の大中臣氏が同一人物ではないまでも、きわめて深い関係にあったのではないかとおもわれる。そのことは、渥美窯の成立を考える上で重要である。つまり、久安二年は、藤原顕長が遠江守に在任していた時である。渥美窯を開いた顕長が、遠江守として湖西窯にも大きな影響を与えた可能性は高い。しかも、それには、大中臣氏のような神官の一族が参画しているものとおもわれるのである。

(2)に記された渡会宗常と(3)の渡会宗恒は同一人物であり、彼は加治御園の荘官でもあった。渡会宗常は、伊勢国度会郡の豪族であり、伊勢神宮外宮の祢宜職を世襲する度会氏の一族である。また、伊勢神宮には、神宮で使用するさまざまな製品を生産する手工業者である内人が存在しており、陶物作もその一つである。この内人は、荒木田氏と度会氏の系統に独占されている。このことから、坪沢窯の経営には、陶器生産の技術を有する内人を一族にもつ、渡会宗常の影響力は大きなものであったに違いない。

このように、渥美窯は御園・厨での経営を主体として発展していく。特に12世紀後半、伊勢信仰が拡大すると、経筒外容器という特殊な高級陶器を主流製品として発展するのである。それは、顕長の時代に、国衙主体によって開発された渥美窯が、より広い地域に生産を広げることであった。それは、次の例からも知られる。

(4) 藤原菊元

承安四年^{甲午}六月日藤井成重山吉成日前守□
南閭浮提大日本国東海道三河国渥美郡伊□
願臨終正念万覚寺釈迦末法之時
往生安楽国以白瓷瓦奉造之

—平安遺文 449—

(5) 敬白

奉施入如法経筒一口
右志者為教豪尊靈出離
生死頓證菩提施入如右 敬白
治承二年七月十二日造之
願主 僧寛喜
造手 藤井成重
敬白

—平安遺文 471—

(4)と(5)に記された藤井成重は、(1)、(2)、(3)の例から、渥美半島の住人である可能性が高い。藤井氏は、外宮の権祢宜系統の一族である。藤井成重も渡会宗常と同様、渥美窯の地域における御園あるいは厨の荘官であったとおもわれる。(5)の経筒外容器が藤井成重によって造られた治承二年(1178)に、藤井重国という人物が、三河国の大目となっている。藤井重国は国司とはいえ、在庁官人と考えられ、また、名前の同質性から藤井成重と同族であった可能性が高い。おそらく、伊勢神宮領の荘官として、早くから三河に土着した藤井氏は、次第にその勢力を拡大し、国司の末端に連なるまでに成長したのであろう。在庁官人として国司の地位を得たとすれば、重国は、少なくとも郡司職にあったはずである。

治承二年に大目となった藤井重国は、顕長によって渥美窯が開窯される保延から久安の頃、渥美郡衙機構の成員であったことは確かである。むしろ、伊勢神宮の勢力を背景に、重国が渥美郡郡司として、実質的な開発者であったかもしれない。大アラコ窯に始まり、坪沢窯などにおける渥美窯の展開をみる時、重国のような、国衙と神領の両方に影響をもつ存在が不可欠であるからである。ついでにいえば、渥美半島最大の豪族と伝承される渥美氏の祖が、重国とされているこ

とは、この藤井重国の治績を反映しているのではないかとおもわれるのである。重国は、郡司あるいは国司として国衙機構に連なる一方、伊勢神宮と深く結びつくことによって、渥美郡最大の豪族に成長していったのであろう。その経済基盤の一つが渥美窯製品であったに違いない。

6. おわりに

渥美窯は、藤原顕長が三河守在任中に、国衙窯として開窯された。京官である兵部大輔を兼任する顕長が、三河国に赴任して開窯の指揮をとったとは考えられないが、熊野や伊勢の埋経に使用する経筒外容器を通して、窯業生産に興味を示したことは十分に考えられる。また、院への寺社・邸宅の造進によって昇進した顕長は、尾張国からの瓦の進貢の例などから、任国の窯業生産に対する認識もあったものとおもわれる。渥美窯が三河国衙の主導で開発されたのは、間接的にはあれ、顕長の意志が働いていたことは確かであろう。しかし、実質的役割を担ったのは、渥美郡内の御園・厨で在地化していた伊勢神宮の神官層であった。彼等は、神官の手工業者である内人から生産技術を入手し、神官の権威を利用して流通を拡大することも容易であった。むしろ、彼等の積極的な行動に、顕長が利用されたというべきかもしれない。いずれにせよ、顕長で代表される古代貴族達の高級陶器に対する欲求と、陶器生産によって経済基盤を確立しようとする新興勢力の要求が合致したことによって、渥美窯が始まるのである。それ故に、渥美窯には、最初から古代的な生産様式を残しており、結局本来的な中世窯として展開することなく衰退していくのである。

参考文献

- 『田原町史』上巻 昭和46年 田原町教育委員会
- 『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』 昭和46年 田原町教育委員会
- 『死の国・熊野』 豊島修 平成4年 講談社
- 『お伊勢まいり』 西垣晴次 昭和58年 岩波書店
- 『伊勢神宮』 藤谷俊雄・直木孝次郎 新日本出版社
- 『国史大系』公卿補任第一篇 昭和57年 吉川弘文館
- 『国史大系』百鍊抄 昭和58年 吉川弘文館